# 児童館を対象にした災害時における子どもの居場所（CFS）に関する研究

建築計画研究室　友成 紗綾

（令和 7 年 2 月 6 日提出）

## １．研究の背景と目的

子どもは、大人に比べ自然災害の影響を受けやすい子。また、災害時は 1 日の生活を乗り切ることや復旧活動が優先され、子どもの遊び・学習の場は激減する。子どもたちの心身と保護者の負担を少しでも軽減するため、災害時こそ、CFS（災害や事故などの緊急事態において避難先で子どもたちが安心・安全に過ごすことができる場を指す）とも呼ばれる「子どもの居場所」が重要である。児童館は、18 歳未満のすべての子どもが利用でき、かつ親子でも利用できる児童福祉施設であるが、その位置づけや役割に関する研究少ない。

以上のことから、本研究は、平常時と災害時の児童館の位置づけと役割について、徳島県の上八万児童館と鴨島児童館、石川県の輪島市児童センターを事例に考察することを目的とする。

## ２．研究方法

文献調査による児童館の現状の把握と、徳島県の児童館を対象に想定される災害リスク、避難所指定の有無を調査した。また、児童館の防災に関する取り組みやその効果ついて知るため、徳島県の上八万児童館と鴨島児童館で実施された「つながる防災プロジェクト」に参加し、児童館の館長や職員にインタビューした。さらに、災害時の実態を知るため、令和 6 年能登半島地震で被災した輪島市児童センターへインタビュー調査を実施した。

## ３．徳島県における児童館の防災に関する取り組み

徳島県には 49 の児童館が所在している。津波の浸水リスクがあるのは 51%、洪水の浸水リスクがあるのは 96%、高潮の浸水リスクがあるのは 45%である。また、児童館及び併設施設が避難所に指定されている割合は 45%である。

また、つながる防災プロジェクトに取り組んでいる上八万児童館と鴨島児童館を調査した結果、防災教育の効果が見られた。両者の共通点として、児童館を拠点にして親子や地域の人と一緒に防災について学ぶことができ、様々な団体の協力のもと、子どもたちが遊びながらも真剣に防災に取り組める実践的な内容だったいう点が挙げられる。このことから、児童館は、親子や地域の人と一緒に学び、実践できる場であることが強みであり、児童館を中心に親子や地域一体で防災教育に取り組める場であることが明らかになった。

## ４．令和 6 年能登半島地震で被災した輪島市児童センターの事例

輪島市児童センターは、指定避難所となっていた輪島市ふれあい健康センターの 2 階に所在している。館内には 1 月 1 日から約 8 カ月間避難所が開設され、8 月 25 日に閉設した。避難者は最多時で 700 人以上おり、館内は避難者で埋まっていた。周辺の公園やサッカー場などに仮設住宅が建設されたことで子どもの遊ぶ場は激減する一方で、まちの復旧が進まないと、館内に留まる避難者も多いままとなることで、子どもの居場所となるスペース確保が非常に困難だった。

地震発生後 4、5 日でインターネットは復旧したものの、上水の復旧は 2 月 25 日から、下水の復旧は 4 月 10 日からで、館内の水場やトイレ等の使用が困難だったことが分かった。また、避難所が長期間開設されていたことで、乳幼児のスペースの開放再開が可能となったのは 3 月 5 日から、小学生以上のスペースも開放され、輪島市児童センターが通常に事業再開したのは 6 月 1 日からであった。このことから、避難者が多数いることと児童館の事業再開の困難さが深く関係していることが分かった。

輪島市内の保育・学校施設で再開が最も早かったのは、1 月 14 日から再開した輪島高校である。同時期にみんなの子ども部屋と呼ばれる NPO 法人のボランティア活動も始まり、子どもたちの遊び・学習の場が設けられた。輪島市全体では、地震発生後、子どもの居場所がない期間は 2 週間存在していた。

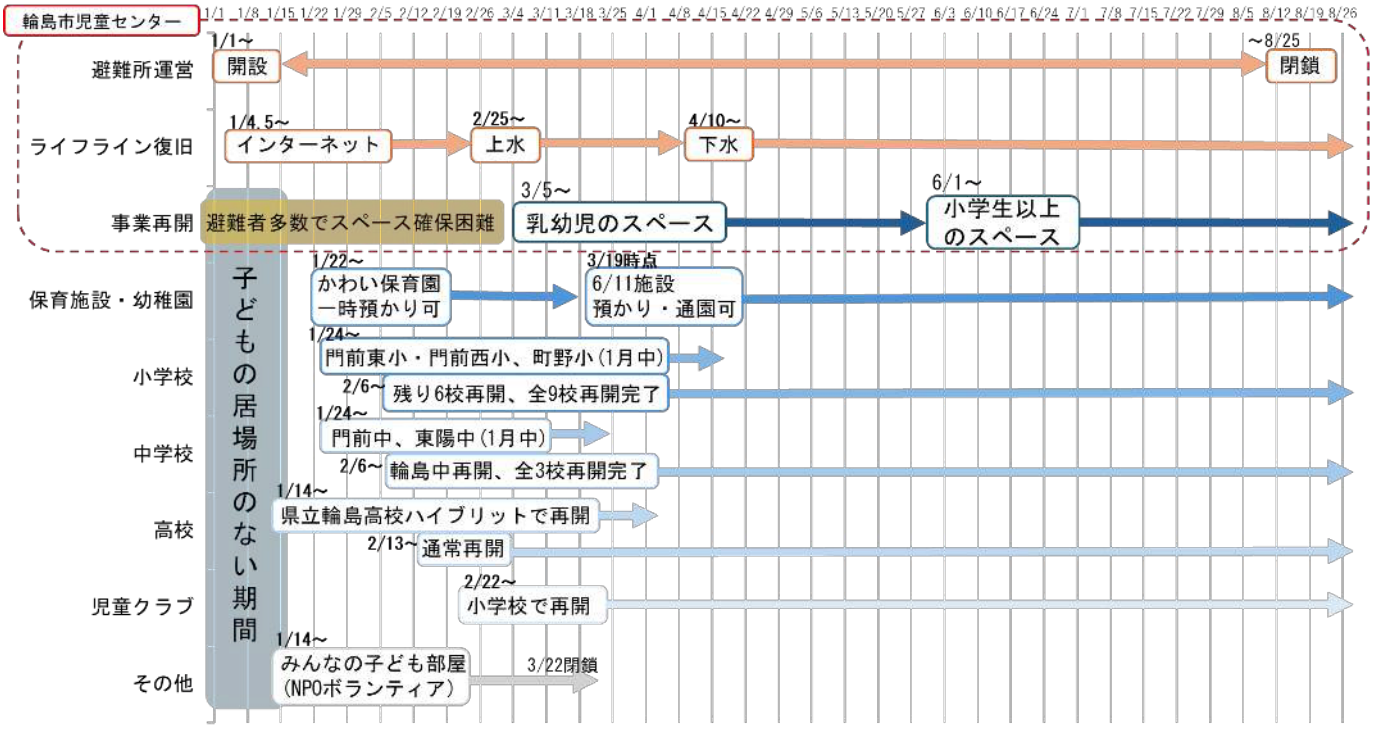


図 1　輪島市児童センターと輪島市内の保育・学校施設の再開状況

## ５．結論

児童館は、遊びを通して子どもたち自身で防災について考え、親子や地域一体で取り組む防災教育の場として非常に有用である。また、災害時には、児童館に避難所が開設される場合、子どもとその保護者のために特化した福祉避難所にすべきである。

そのためには、災害時の様々な状況を想定して、避難者が生活する場と子どもの居場所となるスペースを明確にしておく必要がある。また、避難者が長期間滞在しないためにも、児童館同士や他に避難所に指定されている施設との情報共有・連携することや、児童館の実態を地域や自治体で把握し、災害時に効率的かつ迅速に復旧を進められる計画を立てることが必要である。

また、児童館では、児童館は 18 歳未満のすべての子どもが利用できる児童福祉施設であり、親子で一緒に利用できるという強みがある。この強みを活かして、災害時には、子どもが安心して過ごせる場所を確保し、子どもと保護者のケアを努め、遊び・学習の場を提供することが、CFS として児童館が担うべき役割である。

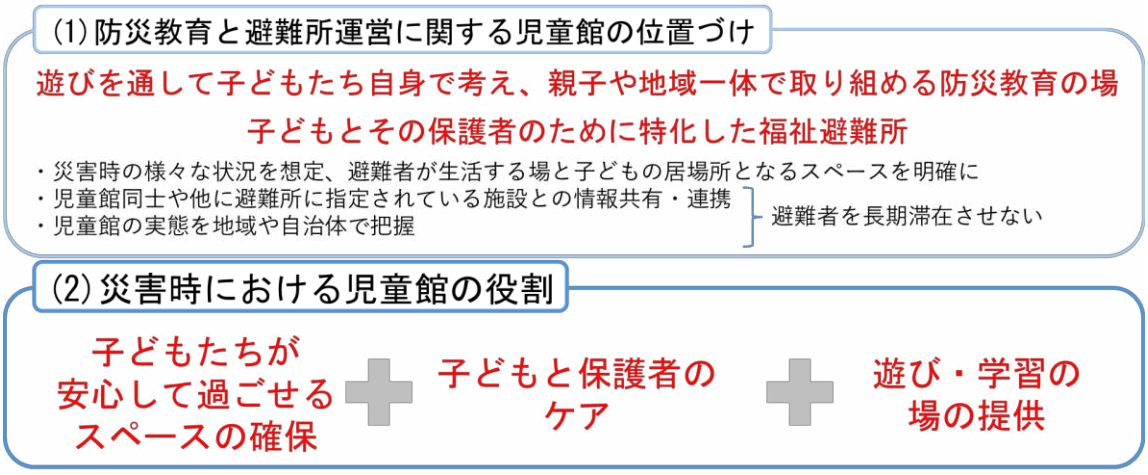


図 2　児童館の位置づけと役割